法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

乾孝が目指した映像論文「心理学」 : ビデオ作品『知覚』を中心に

近藤, 智嗣 / 吉村, 浩一

(出版者 / Publisher)
法政大学文学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要
(巻 / Volume)
50
(開始ページ / Start Page)
63
(終了ページ / End Page)
86
(発行年 / Year)
2005-03-01
(URL)
https://doi.org/10.15002/00004003

Hosei University Repository

乾孝が目指した映像論文「心理学」
—ビデオ作品『知覚』を中心に—

吉村浩一・近藤智嗣

昨年の同誌では，法政大学の心理学草創期を担った城戸幡太郎を取り上げ，日本の心理学会創設に関わる貢献などを中心に，彼の業績を論じた（吉村，2004）。城戸は1924年に法政大学に着任し，戦前の法政心理を一身に背負った。それに続き，このたびは，1930年に法政大学に入学し，城戸の学生として心理学を学び，1935年に卒業した乾孝を取り上げる。乾は，卒業後，助手を皮切りに，1982年の定年退職まで長らく勤務し，戦後の法政心理を特徴づけた。

乾も，師である城戸と同様，社会主義思想をベースに，幼児教育実践や文化・芸術活動など幅広く社会に開かれた心理学を目指す姿勢を貫いた。弾圧と闘争の時代を生き抜いた彼の学的立場は，客観的であることを第一義とする“科学的心理学”に疑問を呈し，必ずしも“没価値的”であることを良しとせず，社会への主体的参加者の視点を尊重するものであった。本稿では，そうした乾の学的活動のうち，映像への感性の豊かさと，それを研究や教育，さらには芸術表現に生かした足跡を見つめ，晩年において心理学の映像作品に結実させた業績に照準を合わせたい。なお，本稿の第1節から第4節は吉村が，第5節は法政大学において乾から直接教育を受けた最後の学生の一人であった近藤が執筆した。

1. 優れた映像想起力と自己開示する力

乾には，幼年期に始まり，老年期に至る6冊の自叙伝がある。『ある幼年』

Hosei University Repository

『ある少年』『ある青年』『或ル兵隊』『ある戦後』『ある老年』である。出版年はこの順序とは異なるが，『老年』を除く5作は，1970年代に一気に語られたテープをもとに書き起こされたものであった。『老年』のみが晩年になって新たに書き下ろされた。この『ある』シリーズは，乾自らも「ある凡人」を標榜していたように，決して偉人伝ではなく，心理学者であることを強く意識して自らの日常と心的生活を回想しているところに，心理学的価値がある。特に，『幼年』から『青年』に至る3作は，太平洋戦争に向かう時代を生きた日本人の心性を，発達心理学的に検討する資料となろう。もちろん，一般読者を意識して，著名人との交友録なども随所にちりばめられているが，映像への感性とそれを生かした心理学への取り組みに言い及ぶ箇所は，今日の知覚・認知心理学にとって興味深いトピックにあふれている。

青年期までの乾は，むしろ「自らを表現すること」，すなわち“自己開示”が苦手で，内気であった。そのことを示唆するエピソードを2つ示そう。

学生時代，たまたま親戚の知人であったことから早稲田大学にいた「性格学」の戸川行男と知り合うことになる。「この時期，内田［勇三郎］さんや戸川さんは『精神分裂型』の学生発掘に蒐集家じみた熱意を燃やしておられたようだ」と前置きして，乾は次のエピソードを紹介している（「精神分裂病」は今日では「統合失調症」という名称に改められている）。

> そんな戸川さんから見ると乾孝は，……妙に内閉的で不器用なところが，まさに「分裂」風で興味をひいたに違いない。ある日彼は30センチ×40センチ位の四角いカバンをもってわが家を訪れ，私をテストすることになった。（乾，1989，p.30）

まず，「連続加算」（内田－クレペリン作業検査）では，毎分45を2つと上下しない，いわゆる無感動型の作業曲線を示した。続く「残像実験」では，図版が取り除かれたあともイメージが鮮明に残るいわゆる「直観像」的様相を呈した。これらの結果は，「戸川さんを相当満足させたらしい」と乾は振り返り，次のように続ける。

Hosei University Repository

「君は30歳になるまでに必ず分裂病になる」と折り紙をつけてくれた。そして，日記を付けなさいという。今まで，心理学の教養をもった人間が，自分の発病までの記録を残した例はない。だからあんたはつまらぬ業績を残すより，その日記で学界に寄与するところが大きいはずたといわれる。

この日以来私は律気に日記をつけ，どんなイタヅラ描きにも日付を記入することになる。召集を解除されて，ふと気がつくと私はもう30歳をすぎていた。「早発性痴呆」にはなりそこなったらしい。(p.31)

抜きん出た映像想起力に加え，イタヅラ描きにまで日付を書き込む習慣は，彼の6冊の自叙伝に貢献したに違いない。

しかし，何より不思議なのは，専門家をして「内閉的」と評させた彼の青年期までの自己表現の不器用さが，ずっと後年とは言え，6冊の自叙伝を出版するという自己開示力に変化したことである。このこと自体，心理学的に興味深いことだが，ここでは，この点に関する一般則的考察ではなく，乾の固有的状況を指摘するに留めたい。それは，法政大学在学中，戸坂潤をはじめ，第一級の社会主義思想家教員に感化され，自らも社会主義者としての学風を築いていったことによると考えられる。心理学を個人内部の心の働きと捉えるのではなく，社会とのつながり，とりわけ心の公共性を目指す学問へと展開する姿勢へと向かわせた。そのことが，自己の心の遍歴を他者と共有する自己開示力を育てたと考えたい。この姿勢は，本稿で焦点を当てるビデオ作品『知覚』にも色濃く反映されている。個人の感覚器官で発生する興奮が，他者と共有できるコミュニケーション手段となる過程が知覚なのだとする，ユニークな知覚論である。

青年期までの「内閉性」を証拠立てるもう一つのエピソードは，1930年，法政大学入学直後から取り組んだ人形アニメーション制作である。友人たちと3人で共同購入したパテ・ベビーという小型映画撮影機を使って，各人が自分の作品作りに取り組むことになった。友人は当然のように実写映画を作った。それに対し，乾は，最初から，気の遠くなるほど手間のかかる人形アニメーションに取り組んだのである。その理由を，乾（1989）は次のように記す。

Hosei University Repository

> 人形アニメというのは，人嫌いで，他人に注文をつけるのが苦手な私にとって，一番気易い領域だったからだと思う。それから何年かの間，私は人形アニメばかり作っていた。役者をする人に，演技の注文をつける自信がなかった性(ママ)でもある。(p.57-58)

学生時代の人形アニメーションは，アマチュア作品とは言え，わが国のアニメーション史上，最初期に属するものである。しかも，その映像は現存している。筆者（吉村）らは別稿で，乾のこの業績を発掘し，歴史的価値を評価する作業を進めている。

映像への優れた感性を携えて，知覚とは“伝え合うための心の働き”との考えに行き着いた乾は，法政大学定年退職後，映像による心理学教材制作に取り組んだ。それは，彼の人生において，学生時代の人形アニメーション作りと不思議に呼応している。役者に演技をつけることが苦手で，一人部屋にこもりこつこつと人形アニメを作ったのが，青年期の乾であった。一方，晩年には，「伝え合う」ことこそ心の最重要な働きであるとの考えに行き着いたにもかかわらず，自宅にこもりやはり何もかもを自分一人でこなして教材ビデオシリーズを作り上げた。両者は対照的であるより，酷似している。

2．心理学実験とは研究手段を実現すること

現在でも，大学へ進学して心理学を学ぼうとする学生の中には，自己を知りたい，心の病の理解と治療に貢献したいとの志をもつ者が多い。このことは，近年の傾向のように言われることもあるが，乾が法政大学に入学した頃も事情は同じで，現在までの一貫した傾向と言うべきである。乾も，“内閉的”である自らのパーソナリティへの興味から，そうした動機で心理学を選ぶことも十分考えられた。しかし，彼自身が語るところによれば，「実験心理学」に対する好奇心から心理学を志したという。幼い頃から映画への関心が強かった乾は，『ある少年』の最後を，「有音映画入門」という節を立てて，次のように結んでいる。

Hosei University Repository

その頃，ふと手に入れたのが山口冷笑氏の『有音映画入門』だった。……『有音映画』と言う題名はサウンド・シネマのことだろうが，まだよく分からないものへの好奇心をそそるものがあった。

何が書いてあったか，まったく思い出せないが，その中に一行「これからの映画は芸術家のカンなどにたよってはいられない。たとえば“実験心理学”などの成果を踏まえて作られるべきである」というような文があった。

理科はだめ，でも文科には抵抗がある受験生にとって，これは一種の啓示であった。「実験心理学」といったって，まったくイメージはない。けれど「実験」というのは魅力的だし，心理学もおもしろそうだ。

どこの高校からも歓迎されないズッコケ受験生が，ようやく法政大学にひろわれて，ここに「心理学」があるのを見つけたとき，なんとなく一種の救いを感じたのであった。(p.197-198)

こうして1930年，法政大学に入学し，「まだよく分からないものへの好奇心」しかもたなかった乾は，そこで恩師城戸幡太郎と出会うことになる。先にも記したよう，乾はこの時期，友人とパテ・ベビーを購入し，人形アニメを作り始めていた。「予科二年間は夜七時以降外出したことがなかったんです。まじめだったのではありません。午後七時以降十二時まで，人形アニメを映していたんです」(乾，1994，p.18) という生活ぶりだった。

ところが，心理学を学び始めた乾は，漠然と想像していた“実験心理学”からはかけ離れた印象を受けることになった。このショックは，情報が発達した現在の「心理学志望者」のあいだでも，しばしば体験されることである。彼らを教える教員の側は，アカデミックな心理学（大学で教え学ぶ心理学）は，ちまたでもてはやされている心理学とは違うのであって，学生はアカデミックな心理学を学ぶべきだと言い放つこともできるかもしれない。この主張の是非はここでは脇におき，乾の場合，「心理学」へのイメージは違っていたにもかかわらず，自らの“趣味”を生かしてアカデミック心理学と妙に相性が合った様子をみていくことにしよう。以下は，乾自身の記述である。

Hosei University Repository

私は映画の実験美学みたいなことが知りたくて「心理学」を選んだつもりであった。

ところが，法政大学は，一年おきに二人入ってきたりする学生のために，研究室と助手を置くと，聞けば素晴らしい迎え方をしてくれたにしては，殆ど何の実験装置も備えてくれませんでした。

城戸先生が，「君がくるまでは，実験なんかやれなかった」といって下さったように，法政大学発表の実験の大部分は，私が装置を手造りしたり，まだ手工業段階にあった竹井製作所長竹井七郎氏に頼んで試作してもらったりした装置で行ったものです。(乾，1994，p.58-59)

予想・期待とは違っていたが，当時の法政心理は，乾にとって，自分らしさを生かす場となった。幼少期から手作業が好きで，美的なものへの憧憬も強かった彼は，心理学にとって必要な実験装置の制作と工夫に手腕を発揮した。現在では，心理学実験に用いる実験装置は，汎用となったパーソナル・コンピュータに集中しつつある。したがって，実験装置を組み上げる能力は，さまざまなアプリケーション・ソフトを駆使してコンピュータを使いこなす能力となっている。しかし，1980年代までの実験心理学では，新しいアイデアを実証の場に持ち込むには，当該実験に固有の装置をいかにして作るかが鍵であった。乾が法政大学に入学した1930年当時，実験心理学はまさにそのようなスタイルを作りつつある時期であった。「君がくるまでは，実験なんかやれなかった」と言った城戸との出会いは，そのような流れに乗ることを促した。渦中にあった乾は，当時を次のように回想する。

むろん，講義に使う簡単な道具はありました。視野計とかソノメーター，ヴント式の瞬間露出器，圧力秤，メトロノーム，三方向分解器，時間測定器，混色盤，錘時計に記録用具くらいはありました。

ところが，城戸幡太郎さんというのはヒラメキのひとで，こんなありきたりの装置で間に合うような問題はお考えにならないのです。(乾，1994，p.59)

Hosei University Repository

こうして，城戸のヒラメキと，乾の手が共同作業を開始することになった。多岐にわたる工夫の紹介は乾（1994）に譲ることにして，ここでは，具体例として，混色実験のための装置と，表情実験のための映像記録法を紹介するに留めたい。

まず，混色実験とは，紙の円盤を黒い円弧と白い円弧部分に塗り分け高速で回転させると，白黒の比率次第でさまざまな明るさの灰色が知覚される実験のことである。現在なら，回転速度を連続的に変化できるモータなど容易に入手できるが，当時の心理学実験室には，一定速度で回転する混色器しかなかった。

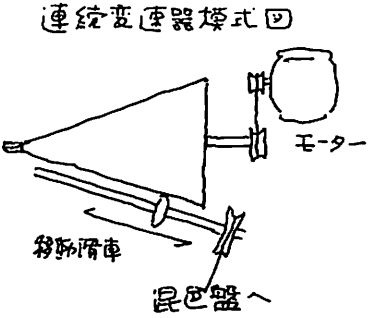

図1　乾が考案した混色器の速度を変えるための仕掛け

> そこで，モーターでラッパ型の円錐を回転させて，それに接する小輪を，半径の大なところから小の方に滑らせる装置を考えつきました。この円錐をラワンでこさえて貰ったんですが，日がたつにつれて歪みが出る。それで廻転ムラが出て困りました。（乾，1994，p.59-60）

出来映えはともかく，実験のための装置作りの“楽しさ”が伝わるエピソードである。乾の描いた構造図を図1に掲げた。この頃からはずっと後の時代の話だが，筆者（吉村）が学生の頃（1970年代），恩師が「近頃は（木工，弱電の）工作室をもたない心理学研究室が増えた」と嘆いておられたのを思い出す。このたび，新しくできた法政大学文学部心理学科も，当然のことのように，工作室をもたない。

次に紹介する「表情実験」では，友だちと共同で購入したパテ・ベビー撮影機が活躍した。表情刺激として使うため，さまざまな人物を写し取る必要がある。「できるだけ日常のたくまぬ表情がほしい」わけだが，撮られる人は，どうしてもカメラを意識して構えてしまう。そこで，乾が目論んだのは，写真を撮られてはいるのだが，「日常性を失わない」表情，すなわち「カメラの前を

Hosei University Repository

意識した，自然の表情」であった。

> そこで，ちょっとした仕掛けを造りました。ゼンマイ駆動の九ミリ半シネカメラに外函をつけて，古典的なスティルカメラのようにこしらえたのです。これを騒音の大きい場所に据えて，「写真を撮りましょう」と言うのですが，その時にはもうカメラは廻っているのです。数秒すぎて，「さ，いきます！」とニセのシャッターを押す。「もう，今更スマしてもだめだよ」などしゃべりながら，更に数秒うつし続けるのです。(p.64)

ここに示した2つの例は，今日から見ると技術的にはプリミティブである。たとえば，今日では，顔刺激を作成するにあたって，モーフィングというコンピュータ上で複数の顔画像を合成したり重みづけたりする技術がある。技術水準は違ってはいるが，実験装置や実験条件の創意工夫が心理学実験の醍醐味であることは，当時も今も変わらない。問題意識と進め方のロジックさえ優れていれば，高価な機器や大げさな装置を使わなくても，心理学の歴史に残る実験は創案できる。そうした観点からの実例を，吉村（1996）でいくつか紹介している。また，取り扱う刺激材料をいかにうまく変数化するかについては，吉村（1999）の「刺激図形の変数化」の節で解説した。それらを通して，「心理学実験の醍醐味」を味わってもらいたい。

3．ビデオによる論文『知覚』

1982年に法政大学の専任教員を辞したのちも乾は非常勤で法政大学に出講していたが，1985年度の途中，脳卒中で倒れ，療養生活を余儀なくされた。乾は1994年2月27日に82歳で死去するが，その間に，心理学教材ともなるべき何本かのビデオを制作している。テーマは，『知覚』『意志』『コトバ』『人格』『表現』『記憶』で，それぞれ数十分から1時間前後の作品である（作品公開については，第5節を参照）。これらは，制作時期や身辺の状況から，その後，自ら教壇に立って使用することを念頭に置いて制作したとは考えにくい。乾は，本稿の著者の一人（近藤）に，「これは紙ではなくビデオというメディアで書

Hosei University Repository

いた論文」という趣旨の発言をしている。それぞれのテーマに対する乾の心理学観が，これらの作品には込められている。中でも最初に作られた『知覚』は，改訂版まで作られている。その「改訂版」に対して，乾は著書の中で次のようにコメントしている。

> 感覚は孤独で，その個体，その場，その瞬間に閉ざされているが，知覚は公共で，いっしょに働きかけるモノの世界についてのイメージを，個をこえ時空的にふくらむことによって協力の可能性を拡げる，というところに重点をおいた」（乾，1994，p.155）

上記著書では，改訂は「第二版」「改訂版」と二度行われたように書かれているが，「改訂版」は現在，所在をつかめない。第5節において近藤が示す事実から，筆者らは「第二版」と「改訂版」は同じものだと推察している。

本節では，1992年5月1日付けで制作された『知覚』（第二版）を，「教材」のみならず「ビデオによる論文」であるとの観点に立って，評価していきたい。全編で扱われている主なテーマは，登場順に，「図と地の問題」「明るさの対比」「大きさの対比」「目立ちやすさの問題」「温度対比」「対比と同化」「奥行反転」「多義図形」「不可能図形」「仮現運動」「メロディの移調」「よい連続」「明るさの恒常性」「大きさの恒常性」など，ゲシュタルト心理学が取り上げてきたテーマが多い。だが，乾はゲシュタルト心理学者ではない。乾の時代にはまだ，知覚心理学＝ゲシュタルト心理学という図式が残っており，ここで取り上げられたテーマ構成はそれほど偏っていたとも言えない。ゲシュタルト心理学に対する共感性をあえてあげれば，それは現象観察を大切にする点であろう。乾自身，現象を感性豊かに観察することを，「知覚」に対する基本姿勢にしていた。ただし，『知覚』の中での乾のゲシュタルト評は，「ゲシュタルト心理学は（心の働き全体に広がらず）知覚の中で遊んでしまい，謎絵全集のようになってしまった」と手厳しい。

乾の『知覚』が，「ビデオによる論文」，すなわちオリジナル性を有すると評価できる点を示そう。まず，「感覚は孤独だが，知覚は公共的」という独自の考え方が，「知覚」に対する乾のグランドセオリーであり，全編，その主張で

Hosei University Repository

貫かれている。特に，結び部分の「知覚の恒常性」や「世界像の共有」では，その主張が明示されている。知覚内容は仲間と共有するためのものであり，したがって，「恒常」であるのは当たり前で，ことさら「恒常知覚」というものがあるわけではないと主張する。知覚研究の中でも，特に乳幼児研究において，大人の視線によって対象物に対する注意が共有されるという知見が一般化している（Scaife & Bruner, 1975; Butterworth & Grover, 1988; Baldwin, 1991; Spelke, Phillip, & Woodward, 1995）。しかし，乾のように，知覚とはそもそも共有性を獲得するための心の働きであると言ってのけているのは，きわめてユニークである。

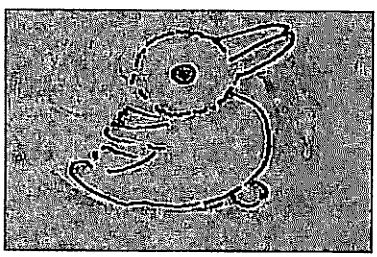

図2　『知覚』に登場する乾の“アヒルとウサギ”

「知覚の公共性」の主張は，乾の最大の強調点ではあるが，必ずしも「ビデオによる論文」による必要はない。それに対し，これから示す諸特徴は，映像であること，動くこと，ふんだんな色表現が可能なこと，音が表現できることなど，視聴覚メディアならではの特徴である。

まず，多くのデモンストレーションに用いられた「刺激の創作」を指摘したい。たとえば，「多義図形」を扱ったところで，よく知られている「アヒルとウサギ」を話題に取り上げているが，それには既存の図形ではなく，図2に示す自ら描いた「ウサギとアヒル」であった。この例をはじめ，全編を自らが描いた絵で彩っている。幼い頃からの絵に対する思い入れがなかったなら，彼の一連のビデオ作品は生まれなかったかもしれない。

「ウサギとアヒル」のような多義図形は，乾のみならず，絵心ある心理学者のイマジネーションをかき立てるようである。“心的回転”の研究で知られるシェパード（1990/1993）も，このテーマに関して，次のようなエピソードを記している。

自然の中の対象が知覚的不思議さを示す顕著な例として，私の高校時代の

Hosei University Repository

できごとをあげておこう。友人のケネス・ハーモンは，芝生で草を食べている（図3に示したような）ウサギを見つけて，次のように叫んだのである。「見ろよ。アヒルが寝転んでるぞ。」それから数年して，私は，アヒルとウサギのあいまい図形が，1900年に心理学者のジョセフ・ジャストローが本の中で図として用いて以来，心理学では有名なものであることを知った。（哲学の分野では，ルードヴィヒ・ヴィトゲンシュタインが，これをさらに単純化した図を，大きな影響を与えることになった『哲学探究』という著書の中で用いてから，よく知られるようになった。）手品師は帽子の中からウサギを出してみせるが，私たちも，ウサギからアヒルを出すという手品ができるのである。（邦訳書，p.38-39）

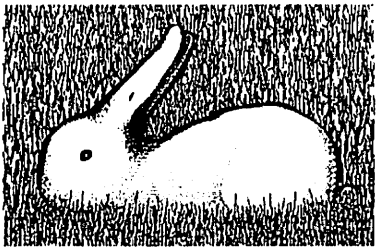

図3　シェパードの“アヒルとウサギ”（シェパード，1993より引用）

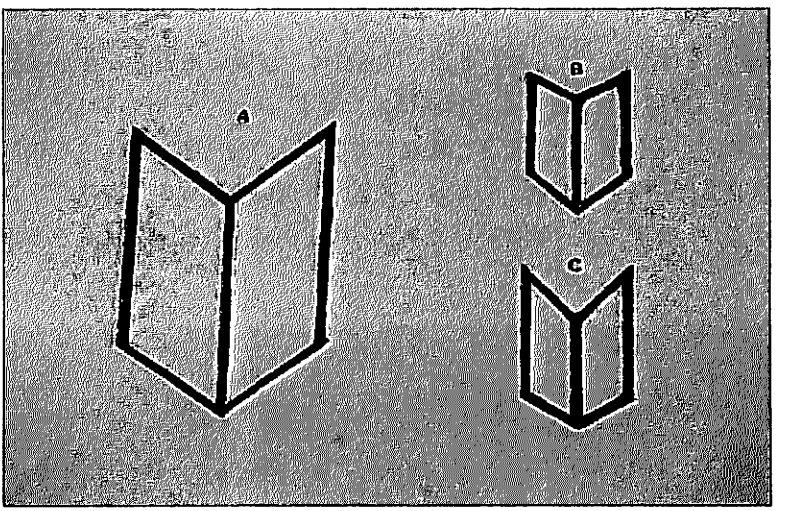

図4　中央の縦線の長さを微妙に変えることによって，山折り・谷折りの見えやすさが変わってくる

Hosei University Repository

デモンストレーション画像に既存のものではなく創作画を用いるこだわりの中から，新たな発見も生まれた。たとえば，奥行反転の説明のために用いた二つ折り図形は，中央の縦線が山折りとも谷折りとも知覚される。乾は，中央の縦線の長さを微妙に変えることによって，山折り・谷折りの見えやすさに変化が生じることに気づいた。図4に示すように，Aの標準的な奥行反転図形を，Bのように中央線を少し長く描けば山折りに見えやすく，Cのように中央線を短くすると谷折りに見えやすくなる。「あまりうまくいっていないが」と本人も苦笑する出来映えだが，パースペクティブの操作が，奥行反転に微妙に影響する実例として興味深い。

上記の図形をさらに膨らませ，屏風のように描いた図形でも，山折り・谷折りが交替する（図5a)。この図形自体は知覚心理学でよく知られているものであるが，乾はこの図形に，図5bのように，左端に折れ目要素を付け加えた。こうなると，屏風はもはや二義的とならず，一義的に確定する。ところがさらに，右端にも同じ要素を付け加えると（図5c)，ふたたび山折り・谷折りが多義的となる。既存の図形にこのような要素を加えることによって，注意深く観察することの大切さをデモンストレーションした。

『知覚』をはじめとする乾のビデオ作品群は，講義に用いられなかったという意味で，視聴覚教材としての役割は果たせなかった。それに対し，「ビデオによる論文」と位置づけるとき，現在および今後の論文発表媒体のあり方に示唆を与える。知覚心理学にとっては，彩色された図を論文中に掲載することが不可欠な場合がある。印刷媒体でカラー図版を掲載すれば，費用面で著者の負

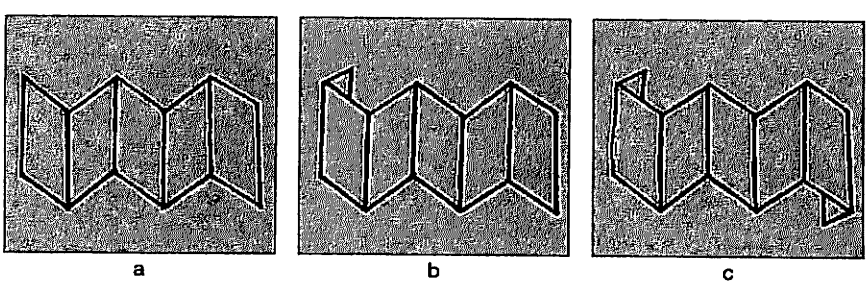

図5　多義図形か一義的図形か，微細な加筆で変化する

Hosei University Repository

担が大きくなるが，ビデオ媒体ならモノクロ画像と異ならない。近い将来，心理学を含む専門科学誌を電子媒体化する動きが進むことが予測されるが，その際に考えられるメリットの大部分は，乾の「ビデオによる論文」に現れている。「カラー画像の投入」以外に，乾の『知覚』で取り上げられた「メロディの移調」での「音情報の投入」も，専門誌が扱う情報として今後，不可欠になっていくに違いない。さらに，より重要なものとして，「動画の投入」がある。特に，静止画図形では想像しにくい錯視的動きを扱う場合，動画によるデモンストレーションは重要となる。

筆者（吉村）にも，運動知覚を扱った論文（吉村・清水，2002）で，CD-ROM化した動画によるプレゼンテーションを輻輳させ，論文の体裁を補った経験がある。これまでは，学術論文といえば印刷媒体と定まっていたが，学術専門雑誌の電子媒体化はもう始まっている。その際，色彩，動画，音声情報を不用意に使うと，逆に思わぬ落とし穴に陥る。たとえば，運動情報に関して，電子媒体化の処理過程で，本来表現すべき運動が歪曲されてしまう可能性がある。ビデオ映像では，本来の連続的運動が，毎秒30枚の静止画としてサンプリング表示される。正確に言えば，映画のようにフィルムに写しとった映像では静止画だが，ビデオでは1枚の画像自体，走査線ビームによって継時表示される。このような性質が，微妙な運動表現にどのように影響するかは，重要な問題であるにもかかわらず，ほとんど検討されていない。動画が学術論文資料として使用されるとき，運動知覚の領域では深刻な問題を引き起こす。たとえば，「仮現運動」では，数十ミリ秒単位での各画像の提示時間と画像間の提示時間間隔が重要である。後の5節において，近藤により，『知覚』をはじめ乾のビデオ作品をインターネット上で公開する際の画像加工が説明されるが，その際にも，メモリ負荷を抑えるため，画像の間引きや解像度を落とす操作が行われている。多くの場合，こうした措置は，運動を実速で再現するのに貢献するため，好ましいこととなる。しかし，扱っている運動現象次第では，深刻な歪みを生みかねない。こうした画像，特に動画像がかかえる問題点を，乾の『知覚』は先取りして洗い出してくれている。

Hosei University Repository

4．乾孝の『知覚』を視聴した学生たちの感想

4．1　調査方法の概要

法政大学文学部教育学科心理学コースで筆者（吉村）が2004年度に開講している授業「認知心理学」では，「ゲシュタルト心理学」について，2回（90分×2）にわたり講義した。乾の『知覚』で扱われているテーマが「ゲシュタルト心理学」中心であることに照らし，このテーマの講義を終えた次の回の授業で，乾の『知覚』（約1時間）を視聴させた。そして学生たちに，筆者の講義内容と乾の『知覚』を比較することを中心に感想を求めた。

受講生たちにはまず，「ゲシュタルト心理学」を扱った2回の授業に出席したかどうかを尋ねた。『知覚』を視聴した回には，30名の学生が出席していた。そのうち，「ゲシュタルト心理学」を講じた2回の授業ともに出席していた学生は11名，2回のうちどちらか1回だけ出席していた学生が同じく11名，そして1度も受講しなかった学生は8名であった。2度ないし1度，講義に出席した学生に対しては，（筆者による）講義方式の授業と，ビデオによる乾の『知覚』を比較して，どのような類似点や相違点を感じたかを自由記述させた。そして，1度も「ゲシュタルト心理学」の授業を聞かなかった学生を含め全員に，乾の『知覚』に対する感想を自由記述で求めた。得られた学生たちの感想は，大きく2つのカテゴリーに分かれた。1つは，登場する個々のトピックへのコメントであり，もう1つは，話の進め方や提示方法全体に関する感想であった。ここでは，両者をメタ・レベルで比較したいため，メタ・レベルでの自由記述を中心に分析する。なお，筆者の講義は，吉村（1995）をテキストに，そこに掲載された図を中心に解説する方式で行った。

4．2　色と運動

まず，講義とビデオの比較を求めた22名の感想の中で，数値的に目立った点は，ビデオでの“色彩”や“動き”の表現に言及した学生が8名もいたことである。講義では，モノクロ・テキストの図を使って静止画で解説した。それに対し，ビデオでは，当然のことながら色と運動が駆使される。ところが，乾

Hosei University Repository

図6　融合（同化）と対比の具体例を生活や文化の中から指摘する

の『知覚』には，色彩知覚や運動知覚を直接扱ったテーマはそれほど多くない（「色の対比」と「線分の仮現運動」のみ）。にもかかわらず，かなりの学生が，色や運動表現を，あえて講義との違いとして指摘したことには，どのような事情があったのだろうか。

“色彩”はむしろ，画才ある乾が，知覚心理学のテーマに直接関わりないところで描き込んだ手作りの絵や，色ケント紙を貼り合わせた表現に多用されていた。前者の例としては，「同化と対比」を説明するために，「馬子にも衣装」（同化）と「サルにカンムリ」（対比）という比喩を使い，きれいな衣装を着た馬子の絵と王様の衣装で着飾ったサルの絵をカラフルに描き込み，滑稽さを演出している（図6）。後者の例は，「感覚は孤独だか，知覚は公共的」という乾独自の主張を，向かい合って座っている2人の女の子のうち，時計を背にした女の子が，相手の女の子に時間を見て（知覚して）もらって時計の知覚を共有している状況を，色ケント紙を貼り合わせて表現している（図7）。このような手作り部分にふんだんに用いられた色彩が，視聴した学生たちの印象に残ったのであろう。

“運動”に関しては，視聴覚教材の提示法について考えさせられる重要な視点が投入されている。動きがもっとも効果的に用いられたのは，“明るさの対

Hosei University Repository

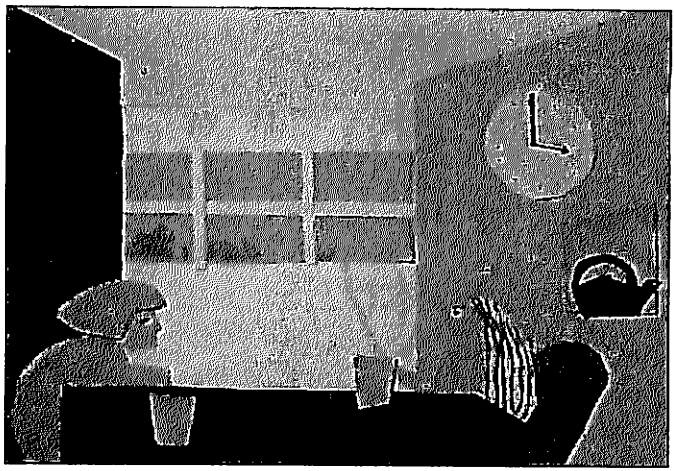

図7　向かいにいる人に時計を見てもらい，時間を共有する

比”を説明する場面であった。画面の右半分が暗い背景，左半分が明るい背景，そして両者をまたいで灰色の四角形が置かれ，中央を黒い縦線が区切っている（図8a）。この状況では，灰色四角形の右半分と左半分の明るさ対比が明瞭である。このショットでは，続いて真ん中に置かれていた黒い線分が，少しずつ脇へ移動するというアニメーション手法が用いられた（図8b）。黒い線の動きに目を奪われていると，いつの間にか灰色四角形の右半分と左半分の明るさ対比効果が消失しており，驚きを覚える。同一ショット内で一連の変化を見せら

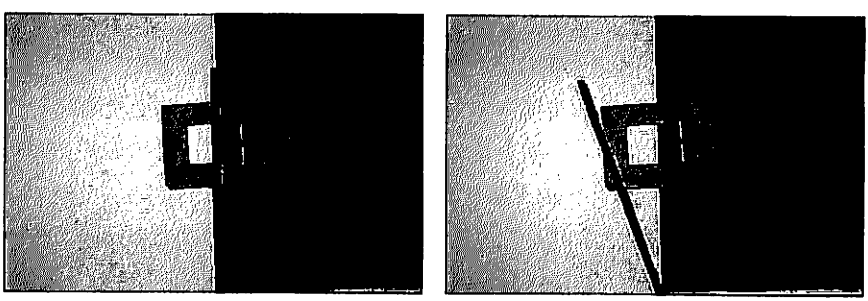

図8　明るさの対比が生じるためには，領域を区切る線が必要であることを区切り線をアニメーションで動かすことにより説得する

Hosei University Repository

れることで，見る者は，対比効果の出現条件を実感する。

4．3　具体例と理論の提示

講義では，ゲシュタルト心理学が繊細な現象観察を重視していたことを，ほぼ「ルビンの盃」だけを例に解説した。その代わり，単に「図と地の反転」に気づくだけでなく，図地反転に伴って，「奥行感の交替」（図に見えている部分が手前に見える）や「輪郭線の所属性の交替」（境目の線は図と見えている対象の側に属する），さらには「鮮やかさの交替」（同じ白でもその部分が図に見えているときの方がより鮮明に見え，黒部分についても同じことが言える）などが連動することへの発見を促し，1つの図を深く観察することの大切さを訴えた。それに対し，乾の『知覚』では，ゲシュタルト心理学に関わる工夫された現象例が次々に登場する。このような提示事例数の違いについて，学生たちは次のような感想を示した。

ある学生は，「吉村先生の授業では，具体例が比較的少ないので，できれば日常の中での具体例を紹介してもらえれば，理解しやすい授業になると思う」と記した。また，別の学生は，「ゲシュタルト心理学自体が“図”をどう捉えるかという心理学であることに関して，吉村先生は論述的に説明される時間が長く，ビデオの先生［乾］は図形を使って実際に見せる（体験させる）ことによっていた。私にはやはり実際に図形なども見て，理論をあとから認識するようなビデオの先生の方が分かりよかった」と書いた。さらに，「やはり実際にいろいろな実験を画像として見せてもらった方が，言葉だけの説明よりも理解しやすく，興味をもてた」と答えた学生もいた。これらは，具体例の量的投入に対するポジティブな評価である。

一方，ふんだんな具体例の提示に，ネガティブな感想もあった。それは，「ビデオの講義では，いろいろな事象を次々に出し，専門的な深い説明は1つの図形に対して長くはない」，「あまり多くの知覚例を見せすぎると，疲れてしまい，集中力が持続しないのではないかと思う。実際，自分も映像を見ていて，疲労感があった」という感想などである。さらに，「ふんだんな具体例」方式に対する配慮を，次の感想から読み取るべきである。「ビデオの方は，最後に“恒常性”とか難しい言葉が出てきて，理解しづらかった」，「ビデオでは，ま

Hosei University Repository

ず身近な図形を使って説明し，具体的な説明をあげているので，知覚のおもしろさに興味がもてると思いました。特に，たくさんの錯視の例があって，分かりやすかったです。ただ，ゲシュタルト心理学についての詳しい説明はなく，[説明が] オマケのような感じに思えました」。要するに，学生たちは理解の照準を具体例の把握に合わせ，共通性に焦点を移した“理論的解説”には違和感，難解さを感じてしまうようである。乾自身がゲシュタルト心理学を「知覚の中で遊んでしまって，謎絵全集のようになってしまった」（上述）と批判したこととも関わる，両面性をはらんだ課題である。

4．4　手作り作品であることへの受けとめ方

『知覚』をはじめ，乾のビデオによる「心理学シリーズ」の最大の特徴は，企画からコンテンツの作成，撮影，編集までの全工程を自らがこなした完全な手作り作品であることと，独自の主張を作品に盛り込んだ点であろう。この2つの特徴は，教材ビデオというメディアの性質に照らすとき，きわめて特異である。後者に関して言えば，たとえ思想的に同調しない筆者にとっても，「知覚とは表現を受けとめる心の働きであり，表現は人間同士のコミュニケーションの基礎をなす」との血の通った主張から，強い意志と斬新さを感じ取ることができ，教材や講義の目指すべき姿を考えさせられる思いがした。しかし，学生たちはこのユニークさにあまり気づかなかったようである。「感覚は孤独で知覚は公共，という言葉を理解できたような気がしました」との記述と，「共有される知覚像とは，同一空間にいる人たちの誰もが同じ知覚像を見ることなのだろうかと疑問に思った」との記述が，それぞれ1件ずつ見られるに留まった。彼らは，この特徴に気づかなかったのだろうか。それとも，感想として書くべきことではないと自己規制したのだろうか。もしそうだとすれば，講義とは知識の伝授であって，教授者の個性的主張を読み取る場ではないとの枠組みが，今日の学生たちには定着しているのかもしれない。

もう一つの特徴である，完全な自作に関しても，学生たちはあまりコメントをしなかった。わずかな指摘も，自作という特徴をメタ・レベルで捉えたものではなく，現れた映像への素朴な印象に過ぎなかった。具体的には，「手作りであったことから，図などの説明に違和感を感じました。もう少し正確に作る

Hosei University Repository

べきだと思います」,「スムーズに流れなかったり，切れ切れであったり，手で動かしたりは，少しいらいらする。直筆の文字や切り絵は面白かったけれど，信憑性に欠けるのではないかと思った」というものであった。テレビや映画での刈り込まれたスピーディな編集に慣れている学生たちは，長すぎるショットやぎこちないつなぎ編集に“違和感”をおぼえるようである。

以上のように，必ずしもポジティブに受け取られなかった“手作り作品”ではあるが，やはり，乾のビデオによる「心理学シリーズ」が有する個性は，当たり障りのない定説の解説ではなく，自らの信念をどうすれば生きた教材として学生たちに伝えられるかを模索した点にある。

本稿の締めくくりとなる次節では，1985年に乾の講義を受講した学生の一人であった近藤が，乾のメッセージをどのように受けとめ，現在携わっている視聴覚教育メディア開発の仕事にどのように生かしているかを紹介したい。

5. 乾との出会いと「乾孝の心理学講座」のインターネット上での公開

1985年，筆者（近藤）は法政大学文学部教育学科心理学コースの4年に在籍していた。乾は1982年にすでに定年退職していたが，名誉教授として第一教養部の「心理学」の講義を受け持っていた。この講義は通年であったが，後期になって乾が脳卒中で倒れたため，途中で講師が交代になったと記憶している。つまり，乾の法政大学での講義は1985年が最後ということになる。筆者（近藤）は，この1985年の講義を聴講したことがきっかけで，北区にある保育所の2歳児クラスのビデオ撮影を手伝うことになった。以降，隔週でビデオ撮影の助手を務め，乾が病気療養中は代行して撮影していた。その後，亡くなるまでの約9年間，ビデオ機器でトラブル等があるたびに出向き，そのような機会に心理学教材映像の『知覚』も見せてもらっていた。

乾の没後10年で，メディア環境としてのインターネットや携帯電話等は飛躍的な普及を遂げ，マルチメディアが日常的なものとなった。ふと大手検索サイトで「乾孝」と検索したところ，乾が予科時代の2年間を費やして制作した人形アニメにも言及した乾の旧友のサイトを発見した。このアニメをビデオ化

Hosei University Repository

したものを私が持っていることを遺族宅に知らせると，本稿の共著者である吉村が，このアニメのオリジナル・フィルムを捜索中だと知った。そこで，アニメのビデオテープを届けるために，およそ10年ぶりに鎌倉山の乾邸を訪問し，その際にこの心理学教材ビデオシリーズを見つけ出すことができたのである。

ビデオテープは見つかったものの，ビデオテープの8割以上に白いカビが生えてしまっていた。鎌倉山は，江ノ島を眺望できるほど見晴らしがよいところだが，海に近い分，カビにとっても絶好の繁殖条件であったようである。無理にビデオデッキに挿入すると磁気テープが切断されかねないため，専門業者にクリーニングを依頼した。カビで貼りついた箇所をていねいに剥がし，カビを拭きとるたいへんな作業である。ビデオテープは約1カ月後，ほぼもとどおりになって筆者の手元に戻ってきた。

この心理学教材の映像は，ストリーミング映像としてインターネットで公開しており，誰にでも視聴してもらえる〈〈http://www.nime.ac.jp/~tkondo/inui/〉〉（近藤，2004；坂元，2004参照）。このサイトには現在のところ，映像8本，音声2本が集録されている。映像のうち6本が自作の心理学教材で，『意志』『コトバ』『人格』『表現』『記憶』『知覚』である。また，1982年に行われた法政大学での最終講義『唯物論心理学の幼年期』と，亡くなる4カ月前の1993年10月に自宅で撮影された『乾孝から見た現代心理学の課題』と題する取材記録が映像として収録されている。映像の合計時間は約8時間である。また，音声として，研究会等を録音した『表現』（1983.7）と『行動主義について』（1990.4）も収録されている。

オリジナルの映像は，アナログのVHSビデオテープであったが，劣化を防ぐためDVテープとしてデジタル化した。さらに，ストリーミング映像にするため，画像サイズを320×240ピクセル，フレームレートを12fpsの映像として，パーソナルコンピュータに取り込み，その映像を225Kbpsと56Kbpsの転送レートのリアル・ビデオ映像に変換した。これをリアルサーバーに蓄積したものがこのサイトの映像である。画質の設定は，フリップに書かれている文字を読むことができることと，一般家庭からでもADSL等のブロードバンドで視聴可能なことを前提として225Kbpsとし，ダイアルアップでも視聴できるように56Kbpsも設定した。今後，インターネットのインフラが向上すれば，

Hosei University Repository

オリジナルと同等の640×480ピクセル，30fpsまで画質を上げることが可能である。

画質の状態は，オリジナルのVHSビデオテープの段階で，すでによくなかった。その理由は，制作当時はデジタルビデオの技術がなくアナログだったためコピーするたびに画質が劣化したこと，専用のビデオ編集機器ではなく2台のビデオデッキでコピーしながら編集していたため，カットの繋ぎ目にノイズやずれがあること，カビなどによるビデオテープ自体の劣化などである。

専用のビデオ編集機器を使用せずに細かくカット編集された映像からは，撮影だけでなく編集時点でもかなりの時間を費やしたことが察せられる。また，『最終講義』は撮影が同録の8mmフィルムで，それをVHSテープへ変換したものである。こちらもビデオが普及していない時代に，1巻3分20秒しか撮影できない8ミリフィルムで，長時間の講義を収録していることを考えると，貴重な資料と言える。

この心理学ビデオ教材について，乾は最後の著書（乾，1993）の「教材ビデオ」の項で，次のように書いている。

> 一九八五年，何回目かの脳卒中のあと，もう出講してもいいだろうというのに出してもらえない。むかし風にいえば，ヒニクノタンというのだろう。ガタガタの三脚に旧式のビデオ・カメラを乗せて，めくったり，しゃべったりして「知覚」というのをこしらえた。冒頭，コントラストの話をいれて，わりあいおもしろく出来たと思う。なり行きにまかせて五十分におさまった。……わかる人に見てもらいたいと思い，波多野［完治］先生に送ってみた。先生は，弟子のこの道楽を本気で受けとめて，わざわざ映画教育協会にいらした折りに鑑賞して下さった。「知覚」と称しているのに，「視覚」に偏り過ぎている。しかし，大学で使えるとの評を下さった。二版にはビデオ・アニメとメロディーのゲシタルトを入れてみた。その後，「表現」，「記憶」，「意志」，「ことば」，「人格」を作った。「感情」がまだ出来ていないが，その前に今年「知覚」の改訂版を作ったのである。(p.154-155)（傍点筆者）

Hosei University Repository

最初に『知覚』を見せていただいたとき，「これは紙ではなくビデオというメディアで書いた論文」という意味のことをおっしゃったのを記憶している。視聴覚教育にも多大な功績を残した乾は，言語偏重を批判し，あえて視聴覚メディアで，乾心理学を体系化したかったのかもしれない。

上記引用文では，『知覚』について，二版と改訂版，二度にわたる改訂が行われたように書かれているが，下記の諸事実から，二版と改訂版は同一のものと考えられる。まず，平成4年（1992年）7月3日消印の乾からの葉書に「『知覚』改訂版みて下さい。曙町にも置いてあります」と書かれている。「社会主義者の心理学」（乾，1993）の奥付は，「1993年8月6日初版発行」となっているが，1992年6/12，7/10開催のこの本の編集会議案内が筆者（近藤）に届いている。この時点では，「ある心理学者の手前味噌」という仮タイトルであったが，中身は全く同じである。つまり，「その前に今年『知覚』の改訂版を作った」とある「今年」とは，1992年である可能性が高い。そして，遺族宅で見つかったビデオテープの背には［知覚92.5.1〈原・tape〉］と書かれている。2カ月の間に改訂を2度行ったとは考えにくい。そこで，現在見つかっているテープこそが最終版で，改訂版と二版は同一のものと思われる。そしてその制作日は，1992年5月1日とするのが妥当である。

重要なことは，乾自身（乾，1992）が「自著自賛」の章の最後に，この「教材ビデオ」を位置づけたことである。自己のさまざまな作品の中で，ビデオ教材への思い入れはひときわ強かったに違いない。

近藤（2004）は，乾によるビデオというメディアをさらにストリーミングで配信することを行ったが，城戸の教えをついだ乾心理学の特徴である「伝えあい」を，このような形で生かせたように思う。

乾（1987b）は，視聴覚教育に対する考え方を次のように述べている。

> 私は大学では城戸幡太郎，波多野完治両先生，視聴覚教育の二大先達の弟子なのですが，一方，映教（現・日本視聴覚教育協会）を通じて加納さん（匿名氏の名前を暴露します）の弟子でもあるつもりです。その教えのひとつに，形のある動きを目にしているのに，それをわざわざ文章にしてその文章をまた映像に制作［翻訳］するのはおかしい，という意味のおこと

Hosei University Repository

ばがあります。つまり，始めから映像で考える［ろ］ということでしょう。(p.30)（［ ］内は乾本人による校正）

筆者（近藤）も，乾から加納を紹介されたことがあり，それ以来，約20年間，映像のまま考えるように努力している。これはまだ身についてないようだが，少なくとも現在の仕事に影響を与えている。一つは，卒業後の約20年間，職を変えても，映像関係の仕事に携わることができ，常に新しいメディアとしての映像を追求することができていること。もう一つは，1998年から法政大学で博物館学芸員資格取得のための「視聴覚教育」という授業科目を担当することができ，その授業では，受講者各人にビデオ教材の制作を課していることである。学生には少々負担が大きいようだが，市ヶ谷キャンパスで約80人の受講生を受け持ったときの受講後アンケートでは，「最初はできないと思ったけど，やればできた」58名（72％），「最初から興味深く楽しく作れた」14名（17％），「授業ではきつい課題だと思う」10名（12％）という結果であった。2分から5分の作品だが，中には感動的な作品や本格的なクレイアニメを制作する学生もいる。ほとんどの学生は，この授業がはじめての映像制作経験となっているが，学生の映像的センスに関わる潜在能力を引き出していると考えている。もちろん，この授業では，現代のメディア環境に合わせてアレンジしているが，根源的には乾から教わった映像に対する考え方を踏襲している。

引用文献

Baldwin, D. A. 1991 Infants' contribution to the achievement of joint reference. *Child Development*, 62, 875-890.

Butterworth, G. & Grover,L. 1988 The origins of referential communication in human infancy. In L.Weiskrantz(ed.) *Thought without language*. Oxford: Clarendon Press. pp. 5-24.

乾孝　1976　ある幼年　いかだ社

乾孝　1981　或ル兵隊　史創社

乾孝　1987a　ある戦後　思想の科学社

乾孝　1987b　研究方法としての映像　視聴覚教育, 41（5月号），30-33.

乾孝　1989　ある青年　思想の科学社

Hosei University Repository

乾孝　1990　ある少年　思想の科学社

乾孝　1992　ある老年　思想の科学社

乾孝　1993　社会主義者の心理学　新読書社

乾孝　1994　増補改訂版社会主義者の心理学　新読書社

近藤智嗣　2004　乾孝の心理学ビデオ教材ストリーミングサイト―ある視聴覚教育研究者の映像による心理学論文集―　視聴覚教育，58（9月号），80-81.

坂元昂　2004　アーカイブ「乾孝の心理学講座」　視聴覚教育，58（9月号），82

Scaife, M. & Bruner, J.S.　1975　The capacity for joint visual attention in the infant. *Nature*, 253, 265-266.

シェパード, R.N.　鈴木光太郎・芳賀康朗（訳）1993　視覚のトリック―だまし絵が語る〈見る〉しくみ―　新曜社　（英文原著，1990）

Spelke, E.S, Phillip,A., & Woodward, A,L.　1995　Infants' knowledge of object motion and human action. In D.Sperber, D.Premack & A.J.Premack(Eds.) *Causal cognition: A multidisciplinary debate*. Oxford: Clarendon Press. pp.44-78.

吉村浩一　1995　心理学と出会う　ナカニシヤ出版

吉村浩一　1996　特殊事例がひらく心の世界　ナカニシヤ出版

吉村浩一　1999　図的に心理学　ナカニシヤ出版

吉村浩一　2002　アーヴィン・ロックの運動知覚論―動画によるプレゼンテーションを輻輳させて―　基礎心理学研究，20, 115-129.

吉村浩一　2004　歴史なき心理学科で歴史を想う―城戸幡太郎と矢田部達郎―　法政大学文学部紀要, 49, 75-97.